

【論文13】

「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」

森 章司

【0】はじめに

〔1〕総合研究「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」は、本「モノグラフ」第1号に掲載した【論文1】「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」に記したように、釈尊の生涯と釈尊教団の形成史を明らかにすることを旨としたものである。このうちの「釈尊の生涯」は言うまでもなく、最終的にはできるだけ詳細に釈尊の伝記を執筆することであり、これについては紛れはないものと思われるが、もう一つの「釈尊教団の形成史」については多少の議論が必要であるかも知れない。なぜなら「釈尊教団」という言葉自体が、必ずしも一般的ではないからである。

ここでわれわれが「釈尊教団」というのは、釈尊在世中においては釈尊を中心に、インド各地に散らばっていた仏教の出家修行者（比丘・比丘尼）たちと、彼らによって形成される各地に散在する一つ一つのサンガを統括するような組織である。要するに「原始仏教教団」とか「初期仏教教団」という言葉は、どちらかといえばぼんやりと三宝に帰依する仏教徒が、観念的な紐帯によって結ばれている一体感のようなものを意味するのであるが、「釈尊教団」というのは「律蔵」の中に使われる「サンガ」という言葉を用いることができるような、全仏教徒あるいは各地に散在するすべてのサンガを統括する「組織的な集団」を指し示そうとしたものである。

ところが釈尊を中心として、当時のインド各地に散在していた仏教の出家修行者たちやサンガを統括するような組織的なサンガが、はたして存在したかどうかということ自体が問題である。仏教の教えを奉じている出家修行者たちが等しく仏教徒と呼ばれるためには、そのようなものが存在しなければならないはずなのであるが、しかしその確たる証拠を見つけることができないという事実もあって、もしそういうものが存在しなかったとすれば、「釈尊教団の形成史」というテーマも砂上の楼閣のように雲散霧消してしまいかねない。

しかしながら「釈尊教団」というものを、組織的な実体を有するものではなく、釈尊の教えと釈尊への信頼という精神的な紐帯で結ばれた観念的な集団をさすというふうに理解すれば、そういうものは確実に存在したであろう。そして従来は、このような集団を指し示すものが「四方僧伽」ということばであると理解されてきた。ところが実はこれにも大きな問題があって、そもそも「四方僧伽」なる概念が存在したかどうかということ自体も問題なのである。

このように本研究が「釈尊教団の形成史」を明らかにするとうたっても、その「釈尊教団」の存在そのものが問題であるとなれば、その「形成史」なるものは何の意味ももたないということにもなりうるわけである。

実は、「釈尊教団」に関する上記のような問題について、筆者はすでに結論を得て、二つの論文を書いた。それは「釈尊のサンガは存在したか——「現前サンガと四方サンガ」序説——」（福田亮成博士の古稀記念特集号として発行された『智山学報』第56輯 福田亮成

博士古稀記念号 平成19年3月)と、「『現前サンガ』と『四方サンガ』」(『東洋学論叢』第32号 東洋大学文学部 平成19年3月)という論文である。

これら二つの論文は、そもそもはこの総合研究から生まれたものであって、さまざまな事情によって他の機関の機関誌に発表することになったが、この【論文13】と、次の【論文14】と同様に、「釈尊教団は存在したか」「もし存在したとすればそれはどういうものであったか」という共通の主題を追究したものであって、本来は本「モノグラフ」に発表すべきものであった。しかしそれがかなわなくなったので、できるだけ本「モノグラフ」に自己完結性を持たせるために、先の二つの論文を読んでいただかなくともおおよその内容がわかるように、まず少々詳しくこれら二つの論文の内容を紹介した後に、本論に入ることとしたい。

なおここでは、「釈尊のサンガは存在したか——『現前サンガと四方サンガ』序説——」を「第1論文」、「『現前サンガ』と『四方サンガ』」を「第2論文」と略称することにする。

[2] 第1論文は、ここにいう「釈尊教団」(「第1論文」ならびに、本「モノグラフ」に掲載した次の【論文14】のいう「釈尊のサンガ」)なるものが存在しなかったとすると、いろいろな面において不都合を生じるということを指摘したものである(以下には「釈尊のサンガ」を用いる)。

第1は、提婆達多が釈尊に「比丘サンガを自分に付嘱してください (mama bhikkhusaṅghaṃ nissajjatu)、自分が比丘サンガを pariharati (指導) しましょう (ahaṃ bhikkhusaṅghaṃ pariharissāmi)」と要求したサンガは、ここにいう「釈尊のサンガ」のようなものでなければならぬであろうし、阿難の釈尊が病気をされた後で、「世尊が比丘サンガに関して何かを語られない間は般涅槃されることはないだろうと考えて、心安らかにになりました」と語ったサンガもここでいう「釈尊のサンガ」のようなものでなければならぬであろうということである。もしそれが観念的なものであったとしたら、「付嘱して下さい」という言葉もないであろうし、そもそもこれを「破僧」とはいわないであろう。「破僧」とは実体のある組織的な集団を分裂させることであろうからである。論文では、しかるに釈尊にはここにいう「釈尊のサンガ」のようなものを pariharati (指導) しているというような意識はなかったように見えるのが不思議である、ということを指摘した。もっとも本【論文13】で取り上げる「仏を上首とするサンガ」は明らかに存在し、これについては釈尊も pariharati するという自覚を持っておられたことは明らかであり、そういう意味では「釈尊のサンガ」にも1,000人とか1,250人の比丘たちから構成される「個別的な釈尊のサンガ」と、地上に存在するすべての仏教の出家修行者と、時間的には未来に存在するであろう出家修行者も含んだ「普遍的な釈尊のサンガ」の2種類がありうるということが予想され、提婆達多や阿難が考えていたサンガは、後者のような釈尊のサンガであったと考えられるに拘わらず、釈尊自身にはその認識がないようであるので、「第1論文」ではその存在の有無に関する問題提起を行ったのである。

第2は、白四羯磨による授具足戒を執り行ってサンガへの入団を認め、比丘あるいは比丘尼の資格を付与したり、あるいは波羅夷罪によって比丘あるいは比丘尼の資格を剥奪してサンガを追放したりするのは、手続きとしては10人もしくは5人以上の、あるいは4人以上

の比丘あるいは比丘尼からなる個々のサンガの羯磨として行うのであるが、しかしそれがここにいう「釈尊のサンガ」のようなものへの入団あるいは追放として、実効性のあるものでなければ、Aサンガにおいて入団を許された比丘がB・Cサンガにおいては比丘と認められないということになるし、Aサンガによって追放された比丘がB・Cサンガにおいては比丘たる資格を保持し続けるという不都合を生じることになる。しかもこれは比丘あるいは比丘尼としてのさまざまな権利や義務が伴うことであるから、けっして観念的なレベルにとどまらない。要するに現実に行う手続きは個々のサンガが行うに拘わらず、その効果の及ぶ範囲としては、もっと普遍的な「釈尊のサンガ」のようなものでなければならぬということである。このように比丘・比丘尼としてのもっとも基本的ないわば法律行為は、釈尊のサンガのようなすべての出家修行者ないしはすべてのサンガを含む範囲において実効性がなければならぬはずであるのに、このようなものが存在したという具体的な証拠がないという問題を指摘した。

第3は先に触れた「破僧」であって、後世においては「破僧」には「破羯磨僧」と「破僧輪僧」の2種類があるとされるのであるが、提婆達多の破僧は釈尊教団を分裂させ、それを奪おうとしたものであって、「破僧輪僧」であることは疑いがない。それにもかかわらず提婆達多の破僧を主題とする「破僧毘度」では、その破僧が王舎城の舎利弗・目連が指導していた個々のサンガレベルの分裂のように描かれていて、釈尊のサンガのようなものを破るようには描かれていないという問題を指摘した。

第4は、第1結集であって、これは釈尊の遺教をまとめるという作業であるから、これもここでいう「釈尊のサンガ」のレベルの作業でなければならぬはずであるが、しかし現実的に摩訶迦葉がリーダーとなって執行した結集は、500人の比丘からなるサンガの羯磨として行われたという不思議を指摘したものである。

このように「第1論文」は、上記の様な矛盾や不都合などを通じて、状況判断的には「釈尊のサンガ」は存在しなければならぬはずであるが、「律藏」に規定され、原始聖典に描かれるサンガは個々のサンガであって、「釈尊のサンガ」のようなものが存在したという確証を探しだすことは難しい、これをどう解釈すればよいのであろうかという問題提起を行ったのである。

[3] 「第2論文」は、観念的なものとはされていたけれども、「四方サンガ」という言葉が地上に存在するすべての仏弟子たちを統合する「釈尊のサンガ」のようなものをさすと理解されてきたので、これをその対概念として捉えられている「現前サンガ」とともに再検証してみたものである。

その結論を端的に要約すれば、厳密には「現前サンガ」の原語とされる‘*sammukhībhūta-saṃgha*’という熟語も、「四方サンガ」の原語とされる‘*cātuddisa-saṃgha*’という熟語も、パーリの原始聖典やアッタカターには存在せず、したがって従来考えられてきたような「現前サンガ」という概念も、「四方サンガ」という概念も存在しない、ということである。

そして従来は「現前サンガ」は個々のサンガ、「四方サンガ」は時間的にも空間的にも未来や四方に拡大するサンガであって、したがって「サンガ」の意味には2種類があると考え

られてきたのであるが、原始聖典において用いられ、「現前サンガ」「四方サンガ」と呼ばれてきた言葉の中に含まれる‘samgha’は、一つの界(sīmā)に住している4人以上の比丘あるいは比丘尼たちすべてが出席し(委任を与えるべきものは委任を与えて)、何らかの羯磨を行いうる条件にある集団をいうのであって、律蔵におけるサンガには二種類の概念は存在しないということを述べた。

具体的にいえば、いわゆる「現前サンガ」と呼ばれてきたものは、その集団が今まさに羯磨を行っている状態をいい、いわゆる「四方サンガ」と呼ばれてきたものは、旧住の比丘・比丘尼からなる日常の構成員のほかに、四方からやって来た比丘あるいは比丘尼が加わって、羯磨を行える条件を具えている、あるいは具える可能性のある集団をいうのである。そして後者のようなサンガが予想されなければならないのは、遊行というものが出家修行者に課せられた重要な修行徳目であって、そのためには園林や建物などの寺院の固定資産が、通常その地域で生活している旧住の比丘・比丘尼のみに独占されるのではなく、四方からやって来る客来の比丘・比丘尼にも開放されて、いつでも自由に利用できる権利が保証されていなければならないからである。要するに「四方」という言葉は、「四方に拡大する」という意味ではなく、「四方からここにやって来、またやって来るであろう」という意味であって、サンガはこの園林や精舎がある、限定された「界」にしか成立しえないということである。

このように今まで理解されてきたような、いわゆる「四方サンガ」と呼ばれてきた概念そのものが存在しないということになるが、その結論がそのまま、いかなる意味でも「釈尊のサンガ」なるものが存在しなかったということの意味することにはならない。なぜなら「第1論文」で指摘したように、「釈尊のサンガ」なるものが存在しなければならない状況証拠は、依然としてそのまま残されるからである。

[4] 以上のような研究の経過をたどってみると、ますます「釈尊のサンガ」なるものの存在を証明することができにくくなっているのであるが、パーリの原始仏教聖典には、「仏を上首とする比丘サンガ(Buddhapamukha bhikkhusamgha)」という言葉が多数見いだされる。あるいはこれがここでいう「釈尊のサンガ」をさすかとも思われるので、本論文が用意されたわけであるが、結論を先に言えば、これも「釈尊のサンガ」を意味するものではない。それほど多くはないが例えば「舍利弗と目連を上首とするサンガ」というような言葉も存し、またそういうサンガが存在しなければ、「律蔵」に規定される羯磨の意味もないことになるからである。

要するに、基本的には「仏を上首とするサンガ」は「仏弟子を上首とするサンガ」と同列のサンガであって、仏典で表される人数は、500人とか1,250人などの大人数の比丘から形成される「大比丘サンガ」であるけれども、律蔵の規定から言えば、この「仏を上首とする大比丘サンガ」は、4人以上の出家修行者から形成される普通の意味のサンガに相当するのであって、それ以外のものではない。「第1論文」において、「釈尊のサンガ」にも「個別的な釈尊のサンガ」と「普遍的な釈尊のサンガ」の2種類がありうることを示唆しておいたが、これは前者に相当することになる。

このように「仏を上首とするサンガ」はけっしてここにいう「釈尊のサンガ」を意味するものではないが、しかし「釈尊のサンガ」は存在するかという以前からのテーマを追及する

「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」

順序として、本論文では「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」がどのようなものであったかということを中心に資料を紹介したうえでその実態を明らかにしておこうというのが、本論の目的である。